鹿島美術研究
年報第32号別冊抜刷
2015年11月15日刊行

15-17世紀朝鮮螺鈿漆器編年および日本製螺鈿器との並行関係検討

小　林　公　治

公益財団法人 鹿島美術財団

㊺ 15-17世紀朝鮮螺鈿漆器編年および日本製螺鈿器との並行関係検討

研　究　者：東京文化財研究所　広領域研究室長　　小　林　公　治

はじめに　研究の経緯と問題の所在

唐代を直接的な始原として近現代まで継続する東アジアの螺鈿は、中国大陸、朝鮮半島、そして日本列島においてそれぞれ発展を遂げた。とは言え、これらの螺鈿はそれぞれが個別独自に展開したのではなく、その始まりのみならず、各時代においても様々な相互影響関係を伴って造られたことが、近年認識されるようになっている。

しかしながら、これまでの主な研究は地域ごとに進められており、各地間の相互関係、また時期的並行関係について言及されることは多くなかった（注１）。

本研究は、16世紀から17世紀にかけて、日本の螺鈿に大きな影響を与えたと思われる朝鮮半島の螺鈿漆器についてのより詳細な編年案の作成と、この時期の日本製螺鈿漆器との並行関係を探り、両者の具体的な影響関係を知ることを目的とする。またこの目的に迫るためには、視野を広げて、東アジアの螺鈿制作に極めて大きい影響を与えた中国製螺鈿漆器の変遷についても検討する必要がある。そこでここではこれら東アジア三地域で共通して採用された特定の文様やいくつかの技術特徴に注目して、まず各地域それぞれの変遷案を設定し、さらに各地域間の比較による相互影響関係の確認と時間的並行関係を検討しようとするものである。また数は少ないながらも、いくつかの作例には紀年銘が伴うこと、また日本ではこれら紀年銘作例に加え、桃山時代を中心とした螺鈿漆器の編年研究が比較的進んでいることから、各時期区分や各作例の実年代についても検討を試みたく思う。

なお、ここで述べる報告は、これまで筆者が実施した調査結果に基づく暫定的な見通しであることを、まず始めに断っておきたい。

１．方法

ある地域の螺鈿器を対象として、その編年案を検討する際には、いきなりすべての器種を総花的に一括して検討するよりは、できるだけ同一器種や器形ごとに検討する方がより望ましい手順かと思う。しかしながら、これまで実見できた該当地域の各種螺鈿漆器は母数に比べその数が限られ、器形・器種別の検討には不十分な数であること、また本研究はこうした各地域全体に対する変遷の見通しを得る目的で着手したことから、ここではこれら地域に共通して利用される文様や一部の技法的特徴に着目して検討を行うものである。とは言え、地域によって主体となる文様が異なったり、ま

た独自的な発展や個別的形態なども存在するため、各地域に共通するものばかりではなく、必要に応じ地域に独自的に表れる諸様相についても検討した。

所属時期検討指標としてある程度有効と考えるこうした着目点としては、a）牡丹や唐花など唐草文の葉形、b）唐草文の起点位置、c）菊花芯の大きさ・形態、d）唐草茎蔓への金属線利用有無、e）唐草茎蔓分岐部の節形、f）茎蔓の交差有無、g）曲線部への詳絲（サンサ）技法の適用有無、h）南蛮唐草の原形と見られる斜行区画ひげ付渦巻文の有無、などがある。

以下、これら各観察点について簡略に述べる。

a）牡丹や唐花など唐草文の葉形

東アジアの螺鈿漆器類においても唐草文は、主要あるいは付属的文様として長期に亘って継続的に使用されたため相互に比較しやすい文様である。ここでは特に葉の形態を時期判断の材料として取り上げた。

唐草葉の形態は古くは釣針形あるいはC字形であるが、以後、コンマ形・f字形・三叉形など複雑化し、最終的には紡錘形やノ字形に変化するようである。また小形のf字形や三叉形などからの変化かと思われるが、大形化したチョロギ形（ヒイラギ様）の葉形がある時期より出現する。さらに釣針形の個別的発展形として勾玉形葉なども出現したように思われる。ただし、複数の葉形が同一器面に共存して描かれている事例もあり、また古手の形態が復古的に利用されたとおぼしき場合も存在するので、本指標は全体的視野から総合的に捉える必要があるように思われる。

b）唐草文の起点位置

唐草文が始まる起点の位置は一様ではない。起点の判断は茎に接続して描かれる葉の向き（基部と葉先端の位置関係）によって行う。唐草の茎蔓端部が描かれている場合、葉の向きがわかれば起点の判断は容易である。高麗時代経箱などでは左右どちらかとなることが多く、古手の中国製螺鈿器では唐草文中央の下端から始まっていることが比較的多いようである。後代には、唐草の茎蔓端が表現されず、起点の判断が困難になる傾向があるように思われるが、こうした場合、茎蔓の中途で葉の向きが相対する箇所が確認されれば、螺鈿制作者はその部分を唐草の起点と意識していたことが推測される。さらに後出的な特徴としては葉の方向の相対点が見い出せない循環唐草となる傾向がある。ただし、こうした変遷は絶対的な指標ではなく、古手の作例でも蓋鬘（ふたかづら）（蓋側面）や輪花形盆周縁唐草のように、表わされた位置との関係で循環唐草として描かれる場合もあるように思われる。なお、筆者の調査例では起点から唐草遠端までの間で葉が起点側を向く矛盾事例は皆無であることから、葉を描く方向につい

てのルールと意識はかなり厳密なものであったことが窺える。また、茎蔓の起点端部やその中途を起点とする場合、そこに雲形の貝片などを置いて起点を表示した作例も多い。

c）菊花芯の大きさ・形態

菊花は特に高麗時代螺鈿器の主要文様である。また菊花文は中国の宋元時代にも多く採用された。中国あるいは朝鮮半島螺鈿器の菊花文を見ると、中心に描かれた花芯は小さな円形であるが、後代にはより大形化し、さらにまた二重化・三重化するなど、複雑大形化の過程をたどるようである。

d）唐草への金属線利用有無

「中国」製螺鈿漆器では基本的に貝片が唐草の茎蔓として一貫して利用されるが、朝鮮半島では古くは金属線が使用され、後に貝片線へと変化する。こうした傾向は唐草葉の形態変化からも認め得るように思われる。ただし、半島では後代に復古表現として金属線で唐草を表現する作例が出現する。

e）茎蔓分岐部の節形

朝鮮半島および日本においてはある時期から、茎蔓の分岐点に節を表現したと見られる貝片が描かれる場合がある。この貝片表現は当初はチューリップのような刺又形に表されるが、後出的には幾何学的文様に変化する傾向があるようである。

f）茎蔓の交差有無

16世紀代の日本製螺鈿漆器のいくつかには、唐草の本線的茎蔓とそこから分岐した茎蔓とを交差させる表現がある。管見ではこの時期の中国製、朝鮮製のいずれの唐草にもこうした表現は見出せないようであり、発案地の判断に有効な指標となる可能性がある。

g）詳(祥)絲(サンサ)技法の有無

詳(祥)絲(サンサ)とは、現代韓国螺鈿制作上の技法名称であり、あらかじめ細長い短冊状に切った貝片やそれを使って文様を表現する技術を示す（注２）。この方法によれば、比較的制作が容易な直線棒状貝片で曲線を造り出すことができるため、螺鈿制作、特に曲線を造る際の簡略的技法として生み出されたと推測される。具体的な出現時期についてははっきりしないものの、本技法は朝鮮製螺鈿にのみ特有なもので、朝鮮時代前期頃に始まったと考えられている（注３）。本研究では唐草曲線の表現技法について検討した結果、古手の唐草は貝片を曲線に切り出して制作するが、ある時期から直線棒状貝片（詳絲）を恐らく器面に押し当てながら短く切りつつ曲線状に貼り付けていく方法が一般化することが確認された。

h）南蛮唐草の原形と見られる斜行区画ひげ付渦巻文の有無

南蛮唐草とは、桃山時代の輸出漆器などに蒔絵で描かれる、左右あるいは上下に斜行を繰り返す区画線を描き、その間に多重蛇行曲線を加える特徴的な文様である（注４）。観察を進める中で、中国製螺鈿漆器では時に建物の柱や棟に南蛮唐草に類似する文様が毛彫りで表現されていることが確認された。その形状は、南蛮唐草と同様、左右あるいは上下を斜めジグザグに分離区画する線が走り、その頂部の両側には渦巻文が描かれ、さらに渦巻文の両側からはひげ状の短い突起が伸びているというものである。こうした特徴は南蛮唐草と基本構成原理が共通することから、この文様は南蛮唐草の原形にあたるものと見ることができよう。

さらに本文様は明、永楽時代の鎗金経箱にも描かれていることから（注５）、15世紀には出現していたと見られ、中国製螺鈿器の時期を考える際にある程度参考となるように思われる（注６）。

以上、いくつかの文様的、また技法的特徴を時期判断に有効な基準として取り上げたが、これらの諸判断基準点は多くはなく、またその存在や形で確実に時期の決定が可能な指標とも言い難い。そこで本稿では、これらを総合的に勘案して表１～３に掲げた各作例の前後関係や所属時期を判断したが、今後それらが変更される可能性はあろうかと思われる。

２．調査研究および検討の対象とする作例

今回、アメリカ国内の５博物館・美術館に所蔵されている関連作例調査を実施できたが、これに加え、当該年度に実施した日本国内２機関での調査によって実見できた関連諸作例を本報告の直接的な検討対象とする（注７）。さらに過去、国内外で行ってきた調査や、各地で刊行された該当時期の螺鈿に関する展覧会図録や書籍、また欧米の各博物館のウェブページ収蔵品公開データ（注８）、なども随時参照し、画像の判読が可能な範囲で検討を行った。

３．検討

１）「中国」製、「朝鮮半島」製、「日本」製螺鈿器の識別

本研究では経験的および観察結果を元に、当該期の螺鈿漆器を便宜的に、「中国」製、「朝鮮半島」製、「日本」製に弁別した。その基準をごく大雑把に記せば、器種・器形などに加え、「楼閣人物図」や「花鳥文」といった具象絵画的図像が文様の主体となっているものを中国製とし、唐草文などを主文様とするものを朝鮮半島製と見做

すというものである。日本本土製と朝鮮半島製の区分は唐草文からは難しい点もあるが、日本独自の器形や特定技法の有無といった点からは比較的容易に思える。もちろん、器物の制作地と螺鈿などの加飾地とが異なる可能性は考慮する必要がある。またこうした基準では制作地が明確にならない作例もあり、これらについてはさしあたって判断を保留している。

２）「中国」製螺鈿漆器の検討

本報告では、26点の「中国」製螺鈿漆器について検討を行った（表１）。検討の結果、これら元代から清代初期に属すと見られる作品群は大きく３期に区分し得ると考えられる。これらの基準は以下の通りである。

「中国」製螺鈿漆器の時期区分と想定年代

中国１期：唐草の葉形が釣針形のもの

唐草の葉形が釣針状のもの、特にNo. １のLACMA蔵花鳥人物漆地螺鈿箱（M.87.206a-b）は対象作例中で最も古手であると考えられ、その葉形はこれまでに南宋代から元代の年代が想定されている作例に比肩し得ると思われる。この時期の他特徴としては、菊花芯表現が小さいことが上げられる。しかしながら、No. ３のMet Museum蔵楽奏人物漆地螺鈿菱形盆（L.1996.47.41）にはこうした特徴に加え葡萄栗鼠文といった後出的な文様が描かれており、この時期の作例としてはやや疑念が残る。１期の年代については今後の検討が重要であるが、上記のように南宋から元代の年代が与えられるとすれば、上限は13世紀以降の可能性がある。また河田貞氏はNo. ２の個人蔵花唐草漆地螺鈿八角合子の年代を14世紀後半とされていることを参考にすれば（注９）、中国１期はおおよそ元代から明代初め（13世紀後半―14世紀代）に相当する時期が想定される。

中国２期：唐草の葉形が釣針形からより複雑に展開しているもの

本期に属すと見られる作例はかなり多い。唐草の葉形はコンマ形・f字形・三叉形など、より複雑化する。また菊花芯がやや大形化するといった傾向も見られるようである。さらに17世紀前半の南蛮漆器に一般的な南蛮唐草の原形と見られる文様が建物柱や棟などに毛彫りで描かれることもある。また「軸盆」と呼ばれる長方形盆の見込み文様は縦向きに描かれるものが多い。実年代の根拠としてはNo. ８の畠山記念館蔵「壬子年」銘花鳥漆地螺鈿長方形盆が重要であるが、ここではこの壬子年が明代宣徳七年（1432）にあたると考えておくと、２期は明代の15世紀から16世紀前半を中心とする時期が想定されるかと思われる。

中国３期：唐草葉形が紡錘形・短冊形のもの

この時期には、唐草葉形がそれ以前より単純化する傾向があり、紡錘形または短冊形を持つものが出現する。菊花芯は大形化したものに加え、二重化あるいは三重化するものも見られる。長方形盆（軸盆）は横向きに文様が描かれるものが出現するが、用途の変化を示しているのかもしれない。また注目されるのは韓国で詳絲（サンサ）と呼ばれる直線棒状貝片による曲線表現技法が１点ながら中国製と見られる螺鈿漆器に確認されたことである。本期の時期・年代については確定的では無いが、明代後期に当たる16世紀後半から17世紀前半頃を想定しておきたい。

３）「朝鮮半島」製螺鈿漆器の検討

本報告では、23点の「朝鮮半島」製螺鈿漆器について検討を行った（表２）。検討の結果、これら作品群を大きく３期に区分したが、これらの基準は以下の通りである。

「朝鮮半島」製螺鈿漆器の時期区分と想定年代

朝鮮半島１期：唐草の葉形が釣針形のもの

唐草文が高麗時代螺鈿器、あるいはそれに近似するものを一括した。唐草の葉形は釣針形で、茎蔓は金属線を使用する。年代についてはこれまでの諸氏による見解を受け、14世紀までの範囲で考えたい。

朝鮮半島２期：唐草の葉形が矢印形・三角形、またはノ字形のもの

朝鮮半島製と見られる螺鈿器の唐草葉形にはいくつかのバリエーションが存在する。本期の作例には、唐草葉形が矢印形・三角形のもの、またノ字形のものを含めた。前者はおおむね金属線を、後者は貝片を茎蔓として使用する。ノ字形の葉形は中国３期に対応するように思われ、そうすると両者には年代的な齟齬を生じているかもしれない。朝鮮製螺鈿器の唐草葉形成立経緯の捉え方が問題となろう。矢印形・三角形葉形が中国２期と思われる個人蔵中国製楼閣人物螺鈿長方形箱唐草葉形（注10）の系譜を引くと考えられることから、本期は朝鮮時代前期（15世紀代）と現段階では考えておきたい。

朝鮮半島３期：唐草葉形がチョロギ形（ヒイラギ様）を含むもの

高橋隆博氏がチョロギ形と呼ぶ、より大形の唐草葉が表されているものを本期に含めた。この葉形は朝鮮時代前中期の螺鈿漆器に特徴的な唐草文と評し得るものであるが、半島で独自に成立したと見るよりは、東京国立博物館蔵楼閣人物螺鈿輪花盆（TH-361）の唐草といった中国の唐草文と系譜的な関係を持つと考えたい。また半島におけるチョロギ形葉形の出現時期もはっきりしない。No. 13のMFA蔵牡丹蝶四方盆（11.10594）の唐草はコンマ形の葉と共伴しており、例えば茎蔓と曲線貝片で描くNo.

８～12と前後関係が逆転する可能性もあるかもしれない。

一群のチョロギ形葉唐草文の前後関係については、唐草起点位置に関する高橋隆博氏の一連の研究（注11）を参考にしたが、明確に起点が描かれていないものについては上述のような方法による起点の位置確認や、茎蔓分岐点に表される節の形態比較などから前後関係を想定した。本期の年代については紀年銘を持つ作例が未実見であることなどから詳細は今後の検討に期したく思うが、天文二十年（1551）に自刃した大内義隆旧蔵と伝えられ、16世紀以前の作と見られるNo. 15東京国立博物館蔵牡丹唐草漆地螺鈿衣装箱（TH-298）の存在から、16世紀前半から17世紀前半と想定しておきたい。また、この年代観に従えば、朝鮮半島では詳絲技法は16世紀前半には出現していたことが予想される。

４）「日本」製螺鈿漆器の検討

本報告では、「朝鮮時代風」の唐草文を持つ12点の「日本」製螺鈿漆器について検討を行った（表３）が、これらは鞍といった日本での伝統的形態や蒔絵技法の使用などから日本で制作されたことはほぼ間違いないところと思われる。これらについては特に時期区分を行っていないが、これは紀年銘を持つ、あるいは伝承等によりその年代がある程度限定されている作例を主に取り上げたためである。

「日本」製螺鈿漆器の想定年代

対象作例の中で最も古い紀年銘を持つものはNo. 1愛知県菟足神社蔵の「天文五年」（1536）銘牡丹唐草漆地螺鈿鞍である。鞍の紀年銘と螺鈿装飾時期とを同一と見做し得るかという問題は慎重に検討する必要があるが、ここでは大きな時間差は無いと考えておきたい。No. 2は別所長治所用と伝えられている鞍で、長治が自刃する天正八年（1580）以前の作と考えられる。No. 3から11は17世紀前半の可能性が高い作例であるが、勾玉形葉を持つ唐草文の一群は、いずれも17世紀前半に日本で造られた作例である可能性が高いことが指摘できる。また、16世紀代の作例が少ないため確定的ではないが、日本での詳絲技法の出現は17世紀前後であることが予想される。

５）「中国」製、「朝鮮半島」製、「日本」製螺鈿漆器の並行関係

以上、ごく簡単に日中韓各地域の当該期螺鈿器についてその時期区分と年代案を述べたが、各地域の相互関係・並行関係についても触れておきたい。中国と朝鮮半島とでは、唐草文の特徴はおそらく元と高麗時代とでは比較的近似しているが、以後差が大きくなっていくように見受けられる。特に、朝鮮半島３期とした時期以降、半島では大形のチョロギ形葉を持つ唐草文が器物の主要装飾文様となって展開するが、唐草文が周縁等を飾る付属的装飾という位置づけであったためか、中国ではf字形、コン

マ形、三叉形、紡錘形といった小形葉の唐草文が明代末頃まで維持されるようである。

日本では、16世紀以降、朝鮮半島の影響を強く受けた唐草文を持つ螺鈿器制作が行われたようである。しかしながら、チョロギ形葉のほか三盛形葉、勾玉形葉といった半島ではほとんど見られない葉形や蒔貝地の採用など、必ずしも半島の動向と軌を一にしていたわけではないように思われ、今後こうしたあり方をどのように理解するのかが問題となろう。そうした一方で、詳絲技法は半島よりもかなり遅れ、17世紀初め頃から広く利用されたようであり、桃山時代螺鈿器の制作に朝鮮半島の螺鈿技術が深く関係していたことが推測される。

4．まとめ　問題点と今後の課題

以上、中国、朝鮮半島、日本それぞれの螺鈿漆器について唐草文を中心とした大まかな変遷案、また相互関係についてある程度の見通しを示した。しかしながら、調査結果および本時期区分案で最も問題に思うのは、中国で多くの作例が確認できるコンマ形、f形、三叉形といった唐草葉形を持つものが朝鮮半島ではかなり少ないためこうした作例を半島１期に含めてしまったことから両地域間に年代的齟齬が生じているという点である。これがどのような実態を反映し、またどのように理解するのかによっては、両地域間の螺鈿史と編年観は大きな変更を迫られるのかも知れない。今回検討を行った作例の数はまだまだ不十分であり、今後、より多くの作例について詳しい実見調査を行うと共に、今回の検討結果についてもさらに多くの観点から検証して行く必要がある。また、螺鈿器以外の漆工品や陶磁器などにも類似の文様が表されており、これらと螺鈿器との関係はどうであるのか、といった点についても方法論的な問題も含めて検討し、より精緻な年代観を得ていく必要があるだろう。

注

(1) たとえば、東京国立博物館『中国の螺鈿』1981年、河田貞・高橋隆博『高麗李朝の螺鈿』毎日新聞社、1986年など。

(2) 国立文化財研究所『螺鈿匠』（韓国語）民族院　2006年　pp. 93-97. 권상오『螺鈿工芸』（韓国語）Daewonsa 2007年 pp. 56-59。

(3) Koji Kobayashi, “Turban Snails and Abalone Shells –The technique of mother-of-pearl inlay on the Korean peninsula” *Korean Lacquer Art, Aesthetic Perfection*, Hirmer 2013年 pp. 79-80。

(4) 南蛮唐草の起源については、かつて荒川浩和氏が中国の渦巻文や蕨手文をその系譜を探る参考とされたことがある（『南蛮漆藝』美術出版社、1971年、p. 151）。中国製螺鈿器に見られるこれらの文様は、南蛮唐草と同じ構成原理を持ち、蛇行曲線の原形と見られる渦巻文を持つことから、南蛮唐草の原形文様であると考えたい。

⑸ 「鎗金宝相華唐草文経箱」、出光美術館『東洋の美―中国・朝鮮・東南アジアの名品』2015年、p. 77、p. 169。

⑹ 南蛮唐草の原形とした本形態以前の文様は、斜交区画線と複数連接渦巻文とが分離して並置されて描かれたものと推測される（参考：「白鶴美術館所蔵琴棋書画螺鈿盒子」図版19、『中国の螺鈿』東京国立博物館　1981年、p. 56ほか）。

⑺ これら直接的に実施した調査の概要は以下の通りである。

①2014年６月22日、浦添市美術館にて牡丹唐草漆地螺鈿提重（首里城公園蔵）、蒲柳水禽蒔絵箔絵螺鈿器局、楼閣人物漆地螺鈿掛板、楼閣人物漆地螺鈿軸盆、唐子甕割故事透漆地螺鈿衝立（浦添市美術館蔵）の合計５件の調査実施。

②2015年１月29日、愛知県陶磁美術館において、同館が2014年に開催した特別展「高麗李朝の工芸」で初めてその存在が明らかになった個人所蔵の漆地螺鈿９件および同館が所蔵する漆地螺鈿１件の調査を実施。

③2015年２月、アメリカ国内のサンフランシスコAsian Art Museum、Los Angeles County Museum of Art（LACMA）、Cleveland Museum of Art、Museum of Fine Arts, Boston（MFA）、ニューヨークのMetropolitan Museum of Artの５機関においてそれぞれ東アジアの螺鈿作例の実見調査および展示品の調査を実施。

⑻ これらの書籍は、東京国立博物館『中国の螺鈿』1981年、荒川浩和『螺鈿』同朋舎、1985年、河田貞・高橋隆博『高麗李朝の螺鈿』毎日新聞社、1986年、国立中央博物館『螺鈿漆器』（韓国語）2006年、Museum für Lackkunst『朝鮮漆工美術 完全なる審美』（英語）Hilmaer Verlag、2013年などである。

⑼ 河田貞「高麗・朝鮮王朝の螺鈿―技法の展開と過渡期の様相―」『高麗李朝の工芸―陶磁器、漆器、金属器―』愛知県陶磁美術館、2014年。なお、河田氏は本作を朝鮮半島製と判断されているが、器形などから、ここでは中国製と見ておきたい。

⑽ 東京国立博物館『中国の螺鈿』1981年、図版２。

⑾ 高橋隆博「螺鈿牡丹唐草文の系譜―本阿弥光悦の螺鈿意匠に関連して―」『Museum』No. 540、東京国立博物館、1996年など。

⑿ 瀧朝子「新収品紹介 螺鈿菊唐草文小箱」『大和文華』123号大和文華館、2011年、p. 53。

⒀ 郷家忠臣「万暦十四年銘李朝螺鈿鞍の問題点」『Museum』No. 303、東京国立博物館、1976年。

⒁ Sir Harry Garner氏がその著書Chinese Lacquer, 1979年でBritish Museum蔵として紹介している唐花唐草螺鈿鞍（pl.179）は本作と同品かと推測される。

⒂ 注⑽文献pp. 22-23。

表１　中国製螺鈿漆器の年代的位置づけと諸特徴

番号	時期区分	作　品　名	所　蔵　者	所蔵者番号	紀年銘年	貝種	所属時期判断を行った文様特徴					備　　考
							主体唐草葉身形	唐草起点	茎蔓素材	菊花芯	南蛮唐草原形	
1	中国 １期 13c 〜 14c前半	花鳥人物漆地螺鈿箱	LACMA	M.87.206a-b		夜光貝	釣針形		曲線貝片	無	無	高麗螺鈿経箱と共通する二重唐草文。
2		花唐草漆地螺鈿八角合子	個人	—		夜光貝	釣針形	上面循環だが下位を意識	曲線貝片	小	無	愛知県陶磁美術館図録2014-100。
3		楽奏人物漆地螺鈿菱形盆	Metropolitan Museum of Art	L.1996.47.41		夜光貝	釣針形	やや片側に寄る中央下端	曲線貝片	やや大	—	表に葡萄栗鼠文あり。唐草葉形から古く捉える。
4	中国 ２期 14c後半 〜 16c前半	花鳥漆地螺鈿長方形盆	Asian Art Museum	BL77M2		夜光貝	コンマ形	中央及び右寄り下端	曲線貝片	—	—	見込み文様は縦位方向。
5		椿漆地螺鈿長方形盆	Asian Art Museum	B77M26		夜光貝	コンマ形	中心・中央下端	曲線貝片	—	—	裏面中央に「嘉靖七年」（1528）年朱漆銘あるが後筆か。 見込み文様は縦位方向。
6		楼閣人物山水漆地螺鈿盆	Asian Art Museum	BL77M3		夜光貝	コンマ形	中央及び中央右	曲線貝片	小	—	不定形貝片土坡も。
7		楼閣人物漆地螺鈿長方形盆	浦添市美術館	418		夜光貝	コンマ形	中心・中央下端	曲線貝片	—	有	初源南蛮唐草には髭状突起無し。 見込み文様は縦位方向。
8		「壬子年」銘花鳥漆地螺鈿長方形盆	畠山記念館		宣德七年（1432）か	不明	コンマ形 f字形	中央及び右寄り下端	曲線貝片	—	—	銘は螺鈿。1432年と考えたい。見込み文様は縦位方向。 東京国立博物館『中国の螺鈿』1981年　図版30。
9		月下人物漆地螺鈿九角盆	Metropolitan Museum of Art	L.1995.46		夜光貝	コンマ形 f字形	中央	曲線貝片	小	—	
10		人物漆地螺鈿硯屏	Metropolitan Museum of Art	1984.34		夜光貝	コンマ形 f字形 三叉形		曲線貝片	やや大	有	南蛮唐草原形文には髭状突起有り。
11		楼閣人物漆地螺鈿掛版	Asian Art Museum	B83M1		夜光貝	釣針形 f字形 三叉形	中央・やや左寄り	曲線貝片	やや大	無	
12		唐草漆地螺鈿鞍	Metropolitan Museum of Art	15.11.3		夜光貝	f字形	中央下端	曲線貝片	—	—	
13		牡丹蝶四方盆	Asian Art Museum	BL77M45		夜光貝	釣針形 f字形 三叉形	中央・やや左右寄り	曲線貝片	やや大	—	
14		楼閣人物漆地螺鈿八花弁盆	Metropolitan Museum of Art	L.1992.62.21		夜光貝	コンマ形 f字形	無し、循環	曲線貝片	やや大	—	
15		花唐草漆地螺鈿分銅形合子	Asian Art Museum	B83M30		夜光貝	f字形		曲線貝片	やや大	—	
16		琴棋書画人物漆地螺鈿箱	Musuem of Fine Arts	11.10654a-c		夜光貝	—	中央	曲線貝片	—	有	衣装・柱の釣針形・f字形文は復古文様?初源南蛮唐草には髭状突起無し。一部幾何学文充填衣装。見込み文様は縦位方向。
17		騎馬人物漆地螺鈿長方形盆	Asian Art Museum	B62M14		夜光貝	コンマ形	中央・やや左右寄り	曲線貝片	二重	—	一部幾何学文充填衣装。 見込み文様は横位方向。
18		楼閣人物漆地螺鈿四方盆	Musuem of Fine Arts	11.1063		夜光貝	三叉形	中央やや左右寄り	曲線貝片	二重	無	
19		楼閣騎馬人物漆地螺鈿中央卓	Musuem of Fine Arts	1986.513		夜光貝	三叉形	循環・上端・中央花	曲線貝片	最大三重	無	南蛮唐草原形文省略形?あり。
20		梅花漆地螺鈿輪花盆	Musuem of Fine Arts	11.10557		夜光貝	コンマ形	循環	曲線貝片	—	—	
21	中国 ３期 16c後半 〜 17c前半	楼閣人物八角盆	Metropolitan Museum of Art	L.1996.47.40		夜光貝	紡錘形 ノ字形	無し、循環	曲線貝片	やや大	有	柱にコンマ形あるも復古文様?
22		西王母故事漆地螺鈿硯屏	Cleveland Museum of Art	1978.2		夜光貝	紡錘形 ノ字形		曲線貝片	—	有	器形は単純。一部文様は幾何学文充填。南蛮唐草原形文は渦巻文を連結。鳳凰尾のf釣針形・f字形は復古文様?
23		花鳥漆地螺鈿長方形盆	Metropolitan Museum of Art	L.1996.47.39		夜光貝	紡錘形 ノ字形	中央下端	曲線貝片	二重	—	見込み文様は横位方向。
24		楼閣人物漆地螺鈿合子	Metropolitan Museum of Art	L.1996.47.42		夜光貝	紡錘形 ノ字形	循環	曲線貝片	—	無	
25		花鳥漆地螺鈿天目台	LACMA	M.81.125.2		夜光貝	紡錘形 ノ字形	循環	曲線貝片	無	—	
26		楼閣人物山水漆地螺鈿食籠	LACMA	M.80.95a-b		夜光貝	紡錘形 ノ字形	循環	祥絲貝片	—	—	一部文様は外形線と幾何学文充填。祥絲技法の利用から、最も新しいか。

表２　朝鮮半島製螺鈿漆器の年代的位置づけと諸特徴

番号	時期区分	作品名	所蔵者	所蔵者番号	紀年銘年	貝種	所属時期判断を行った文様特徴					備考
							主体唐草葉身形	唐草起点	茎蔓素材	菊花芯	茎節形	
1	朝鮮半島１期 14cまで	菊唐草漆地螺鈿経箱	Musuem of Fine Arts	11.10556		夜光貝	釣針形	左右端	金属線	小		唐草は中央基軸線を挟み上下に転回。
2		菊牡丹唐草漆地螺鈿経箱	個人（奈良国立博物館寄託）	—		夜光貝	釣針形 コンマ形	左右端	金属線	小		唐草は中央基軸線を挟み上下に転回。
3		牡丹唐草漆地螺鈿経箱	北村美術館	—		夜光貝	f字形	右端	金属線	—		唐草は牡丹花振幅内で上下に転回。
4		菊牡丹唐草漆地螺鈿箱	大和文華館			夜光貝	f字形 釣針形	左右端・側面は循環	金属線	小		唐草は冗長だが牡丹花振幅内で上下に転回。 瀧朝子氏は本作の年代を14世紀後半から末頃とされている（注12）。
5	朝鮮半島２期 15c	花唐草漆地螺鈿中央卓	Metropolitan Museum of Art	L.1992.62.2		不明	矢印形	天板中央下端・袴脚中央下端	金属線	—		以下３点はこれらだけに見られる葉形だが、個人蔵中国製楼閣人物螺鈿長方形箱（東京国立博物館1981図版２）に同形唐草葉あり。中国２期に属すか。
6		花唐草漆地螺鈿稜花盆	東京国立博物館	TH-363		不明	矢印形 三角形	中央下端	金属線	—		同上
7		花唐草漆地螺鈿稜花盆	Metropolitan Museum of Art	L.1992.62.1		鮑貝か	矢印形 三角形	中央下端	曲線貝片	—		同上
8		菊唐草漆地螺鈿小箱	個人			不明	ノ字形	各列中央寄り	曲線貝片	—		以下５点も朝鮮半島では異系列か。
9		菊唐草漆地螺鈿円形合子	東京国立博物館	TH-466		不明	ノ字形	蓋ほぼ中心	曲線貝片	—		同上。東博では14cとするがそれよりは後出ではないか。
10		菊唐草漆地螺鈿四方盆	個人			不明	ノ字形	中心	曲線貝片	—		同上。
11		菊唐草漆地螺鈿経箱	文化庁（九州国立博物館）			不明	ノ字形	中央花	曲線貝片	—		同上。
12		菊唐草漆地螺鈿稜花盆	韓国ハッコジェ（学古斎）			不明	ノ字形	中央近辺	曲線貝片	二重		同上。
13	朝鮮半島３期 16c前半〜17c前半	菊牡丹唐草長方形箱	Museum of Fine Arts	11.10594		鮑貝	コンマ形 チョロギ形	蓋中央・側面やや左中位	金属線	三重		チョロギ形葉形の初出か。コンマ形葉と共伴。
14		蝶蜻蛉牡丹唐草漆地螺鈿方形箱	Museum für Lackkunst			夜光貝	チョロギ形	蓋蔓の片側下端	祥絲貝片	—	臼形	
15		牡丹唐草漆地螺鈿衣装箱	東京国立博物館	TH-298		鮑貝	チョロギ形	蓋一長辺中央端・側面循環	祥絲貝片	—		毛利家伝来。高橋氏は天文二十年（1551）以前とする。
16		牡丹唐草漆地螺鈿方形箱	Metropolitan Museum of Art	L.1992.62.24		夜光貝	チョロギ形	蓋短辺側下端を意識・側面は循環	曲線貝片	—		明月院牡丹唐草螺鈿膳と唐草構成類似品だが祥絲ではない。 小品の故?
17		牡丹唐草漆地螺鈿長方形箱	韓国イラムガン（日厳館）			不明	チョロギ形	蓋短辺側下端を意識・側面は循環	祥絲貝片	—	定型的刺又形	明月院膳と唐草構成類似品。時期並行とすれば17c前半?
18		牡丹唐草漆地螺鈿長方形箱	Asian Art Museum	2006.6.a-.b		鮑貝	チョロギ形	蓋短辺側下端を意識・側面は循環	祥絲貝片	—	定型的刺又形	上記品とほぼ同パターン。
19		「万暦十四年」銘牡丹唐草漆皮螺鈿鞍	東京国立博物館	TH-1504?	万暦十四年（1586）	鮑貝か	不明	不明	祥絲貝片?	—	不明	郷家1976による（注13）。
20		牡丹唐草漆地螺鈿長方形箱	個人	—		不明	チョロギ形 三･二盛形 勾玉形	中途	祥絲貝片	—	三叉形	中央博2006-36。
21		牡丹唐草漆地螺鈿長方形箱	個人	—		不明	チョロギ形	蓋中央やや短辺寄り・側面は循環	祥絲貝片	—	三叉形	明月院膳と唐草構成やや異なり、離れ唐草あり。
22		牡丹唐草漆地螺鈿長方形箱	東京国立博物館	TH-2		鮑貝	チョロギ形	蓋中央やや短辺寄り・側面は循環	祥絲貝片	—	三叉形	上記品とほぼ同パターンだが、四隅に不定形貝片貼付。
23		牡丹唐草漆地螺鈿長方形箱	国立中央博物館	德4182		鮑貝	チョロギ形	蓋循環だが短辺中央を意識か、側面は循環	祥絲貝片	—	三叉形	

表３　日本製螺鈿漆器の年代的位置づけと諸特徴

番号	推定年代	作品名	所蔵者	所蔵者番号	紀年銘年	貝種	所属時期判断を行った文様特徴				備考
							主体唐草葉身形	唐草起点	茎蔓素材	茎節形	
1	16c前半	「天文五年銘」牡丹唐草漆地螺鈿鞍	菟足神社	—	天文五年（1536）	夜光貝	チョロギ形 三盛形	前輪・後輪 中央下端	曲線貝片	簡略的 刺又形	蒔貝地。
2	16c後半	伝別所長治所用三巴紋漆地螺鈿鞍	個人	—		夜光貝	チョロギ形	前輪・後輪 中央下端	曲線貝片	無	蒔貝地、茎蔓が交差。
3	17c初?	伝本阿弥光悦寄進唐花唐草漆地螺鈿箱	本法寺	—		鮑貝か	チョロギ形	蓋中央部、 身側面角か	祥絲貝片	—	茎蔓が交差。
4	17c第１四半期?	牡丹唐草沃懸地螺鈿箱	東京国立博物館	H-4468		鮑貝か	チョロギ形 三盛形	不明	祥絲貝片	三叉形	
5		牡丹唐草漆地螺鈿膳	明月院	—		鮑貝か	チョロギ形 二盛形 一盛形 屈曲二盛形	片側一辺側	祥絲貝片	三叉形	
6		唐花唐草漆地螺鈿鞍	V&A Museumか（注14）	FE.199-1974		不明	チョロギ形 勾玉形	不明	祥絲貝片	二叉形	唐花花芯は二重。本法寺箱より後出か。
7		「慶長十八年」銘瓢箪牡丹唐花唐草蒔絵漆地螺鈿鞍	Museum für Ostasiatische Kunst	E 11,2	慶長十八年（1613）	鮑貝か	チョロギ形 三盛形		曲線貝片	簡略的 刺又形	茎蔓が交差。捩り唐花花芯は二重。
8	17c第２四半期?	縞唐草螺鈿蒔絵筆筒	サントリー美術館			不明	勾玉形 チョロギ形	不明	祥絲貝片	—	No.6 V&A Museum蔵螺鈿鞍の勾玉形葉も同形か。国内向け南蛮漆器?
9		「茶弁當」銘牡丹唐草漆地螺鈿箱	Musuem of Fine Arts	11.10593a-b		鮑貝	勾玉形 チョロギ形	中央中心	祥絲貝片	—	No.6 V&A Museum蔵螺鈿鞍の勾玉形葉も同形か。
10		牡丹唐草漆地螺鈿鞍	南蛮文化館			鮑貝か	勾玉形 チョロギ形	不明	祥絲貝片	—	No.6 V&A Museum蔵螺鈿鞍の勾玉形葉も同形か。
11		伝佐竹氏所用牡丹唐草漆地螺鈿鞍	個人	秋田県 指定文化財		鮑貝か	勾玉形 チョロギ形	不明	祥絲貝片	—	同上。
12	17c末 〜 18c初	牡丹唐草漆地螺鈿提重	首里城公園	341		鮑貝	チョロギ形 二盛形 三盛形	天板循環、 側面下から 両側上・身 側面・見込 中央から左 右	曲線貝片	簡略的 刺又形	茎蔓が交差。17世紀代の模倣か。年代は高橋隆博氏に従う（注15）。